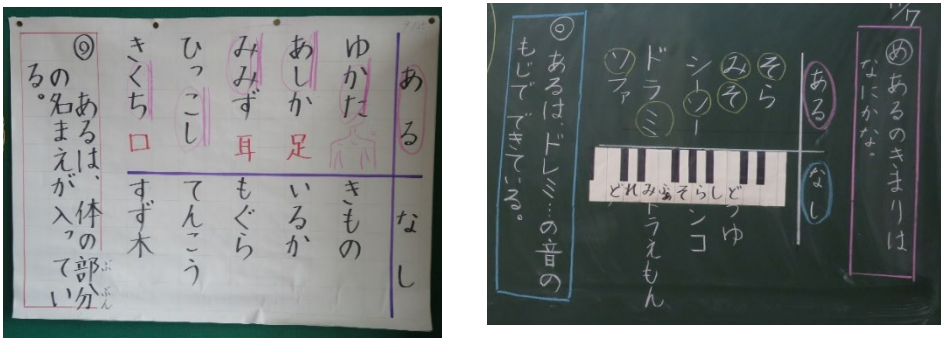


教材・支援機器活用実践事例

話したり聞いたりする活動に苦手意識のある子ども達が、  
話し合うことへの意欲や発見の楽しさを感じることができるようするための教材の工夫  
「みんなで学習すると楽しいね『あるなしクイズ』」

子どもについて	所属・学年	小学校・特別支援学級（知的障がい）
	障がい名等	知的障がい
	子どもの実態 （学習上又は生活上の困難さ等）	○ 学級の人数が多く（7名）、学年も異なるため、個別指導の時間が十分にとれない。「話すこと・聞くこと」などの学習で、相手意識が低い。 ○ 個の学習意欲、能力の差が大きい。（おしゃべり・多動・発語が少ない等）
授業について （教材・教具を使用した授業や指導場面）	教科名等	国語 自立活動（人間関係の形成・コミュニケーション）
	単元(題材)名	あるなしクイズ
	単元(題材)の概要	○ いくつかの言葉の共通点（ものの概念、使われている文字、隠れている言葉など）をみんなで見つける。
教材について	教材・教具・支援機器	【名称】あるなしクイズ「あるのきまりは何か？」 
	ねらい・工夫点等	○ 机間指導で、児童それぞれの思考を見取り、2～3つのグループに分ける。自分が気付いたことを話したり、友達の考えを聞いたりして、自分たちの答えを決める。「誰に聞いても答えられるようにしてね。」と指示することで、互いに曖昧なところを確認し、共有するようにした。 ○ 発表は、互いの発言を生かしながら、正答にたどり着くことができるように教師がコーディネートした。教師や友達が話したことを「○○さんは何て言ったの？」と別の児童に自分の言葉で話すように促したり、「他にもきまりに合う言葉はあるかな？」と尋ねたりすることで、理解の具合を確かめ、より学習を深められるようにした。
	材料・作成方法等	○ 図書館等を利用して、複数の児童向けのあるなしクイズの本から、本学級の児童にも理解可能な問題を20問程度ピックアップした。授業では、黒板に書いてクイズを進めるが、学習したものは、話し合いの過程も含めて模造紙に書き、掲示した。掲示物があることで、既習を生かして学習に取り組むことができた。
子どもの変容や評価	○ 継続して行ったことで学習の進め方に慣れ、「今日の問題は何か？」と児童は課題を毎回楽しみにしていた。また、なかなか答えが分からない児童も、みんなと話し合える安心感から、途中で投げ出すようなことなく、最後まで集中して課題に取り組むことができた。 ○ 「分かったことをみんなに知らせたい。」「早く答えを知りたい。」という気持ちから、「分かるように話そう。」「しっかり話を聞こう。」という態度が育った。	

(令和元年度)